私たちは忘れない

三井から殺されたことを！

眞夜中にフト目に浮ぶ……

あの白木の棺の列

三川大爆発でご主人失った中村恒子さんの話

十一月九日はあの三川鉱大爆発から五年目。私たちも怒りあらたに闘いに立ち上がる日ですが、五たびめぐりくる日を前に遺族の中村恒子さん（新巻社宅）をたずねてみました。中村さんは病弱な体をいたわりながら、残された二人の子供（恵一君、功君）と日々を送っています。これは中村さんのつきることなき怒りと悲しみの記録です。

説得ハネ返す

中村恒子さんのご主人伝造さんは、昭和十八年に三川鉱に入った。伝造さんの実家である商店がつぶれ、一時の腰かけのつもりで入った炭鉱だったがやがて戦争へ召集され、戦地から帰るところも三川鉱しかなかった。

通気検定の仕事につき、やがて恒子さんと結婚したのが昭和二十三年だった。

あの三池闘争中も、坑内ガス検定ということで組合と会社の話し合いの結果、八日に一回は保安要員として出勤していた。

ガス検定という特殊な仕事の性質上、周囲は係長、係員ばかりの仕事だったし、だからこそ組合が分裂させられると、たちまち「この仕事は新労にしかさせないから」といわれ、何回となく説得をうけていた。

昭和三十五年の暮れ、三池闘争が終結して坑場復帰が行なわれだすと、三池労組にとどまった伝造さんは、たちまち坑内通気工に追い出されてしまった。

伝蔵さんにとってははじめての坑内労働でもあり、昭和三十六年一月にはギックリ腰でたちまち休むということになった。

そのときも係員が社宅にまできて「無線の技術までもっている中村さんが、旧労にいるのは惜しい。新労にきて、やがて職員にもなってもらわねば……」といって説得したが、そのときもキッパリと断ったのだった。

五年間の療養生活

恒子さんは伝造さんと結婚して以来、両親の看病や二人の子どもの養育などで日を追われてきたが、やがて親がなくなった昭和二十九年には恒子さんの肺が結核に冒されているのが発見された。天領病院（三井の会社病院）から銀水園（国立結核療養所）と、二人の子どもを伝造さんにあずけて入院生活がつづいた。

左肺上葉の全部を摘出するという手術をうけ、その結果が思わしくなく二回目の手術、さらに三回、四回と手術をつづけてやっと恒子さんが健康をとりもどしたのは、昭和三十四年になってからであった。

退院と同時に新港町に社宅をもらい、移り住んでからすぐ三池闘争に突入したが、それでもはじめての親子四人の水入らずの生活がはじまったのだった。

恒子さんは四回の手術で何本かのアバラ骨をとり背中が変型し、肺活量は一、〇〇〇ccにまでおち、体力は激減していた。

それをカバーして家の中の洗濯から、ちょっとした重い買物まで、伝造さんは仂いた。十分に食事の世話もできないほど弱っていた恒子さんを伝造さんは

まるで原子雲

昭和三十八年十一月九日午後三時十五分ごろ、中村さん宅には奥さんの恒子さんと長男の恵一君がおり、次男の功君は外に遊びにでていた。

ドド、ドーンとまるで地底をゆすぶるようなひびきが社宅の真下からゆすり上げるようにひびいてきた。恵一君が「おかしかネ、お母さん」といぶかしそうに顔をあげた。

そこに次男の功君が飛び込んできて「お母さん来てんネ、黒か煙が三川鉱の方で上がりよるばい、あれが原子雲ちいうとげなたい」といったが、恒子さんは妙に体が固くなって、コタツに座ったまま動くことができなかった。

やがて三川鉱の坑外で爆発がおきたげなという話が伝わり、テレビにもそんなニュースがでた。しかし、いつも四時にはキチンと帰ってくる伝造さんの姿がみえない。人車は午後三時二十五分から三十分には昇坑してくることは知っていたので、何かの都合で昇坑が遅れたのだろうと思っていた。坑内の坑道は仕事上一番くわしい主人だし、どんなことがあっても坑内で迷うというようなことはないだろう。もし三川坑口がダメならば宮浦からでも昇坑してくるだろう。そのときは会社の風呂には入らずに帰ってくるだろうから、お湯でもわかしとこうと思ってその準備をしていた。そのとき前の社宅の人が

「坑内もひどくやられとるそうだ」と話している声が耳に入り、とるものもとりあえずいっさんに三川鉱まで走っていった。

三川鉱の正門は閉ったままで何もわからない。組合の三川支部に入っていくと、もう人でいっぱい。

生きて帰ってくる！

ただじっと知らせを待つ以外にない。夜はふけていったが何もわからない。

ああ、もう朝の三時になった。もう四時になったと時計をみていたのだけを恒子さんは覚えている。何時ごろだったか、谷端支部長が立ち上がって

「つぎに呼ぶ人は天頂に收容されたので行って下さい」といって中村さんの名前を最初の方に読み上げた。恒子さんは最後まできかずに支部をとびだした。

近所の社宅の同じ転場仲間の奥さんが横について走りながら、腕をしっかりとかかえて、

「奥さん、しっかりせないかんよ」といってくれる。天頂に收容されたというので、てっきり生きて收容されたと思いこんでいた恒子さんは

「生命だけはあってよかった」というので、その奥さんもそれ以上いえない。伝造さんが三百メートル坑道ですでに息き絶えていたということは早く確認されていたが、だれも恒子さんに知らせることができなかった。

「はよ来んネ、間に合わんよ」と遺体を搬入する入口の方に引っぱって行った。

間に合わんというので、てっきり息があるのだと思ってその人の後についてはしっていった。

遺体をはこびこむ病棟の入口には伝造さんの冷たい体がのせられたタンカだけが残してあった。

伝造さんは死んでいた。はっと走り寄ると同時にタンカの横にいた人が

「中村さんですね、確認しますね」というとさっとタンカを持上げ車のついた台車にのせてダーッと廊下を走りだした。

やっとみつけた伝造さんがドンドン持ち去られるので、もう離れたらいかんと思って無中で走っていった。

処置室の前までくると、待ちかまえた人が伝造さんが着ていた作業着をペッと脱がせ、ポケットをさっぐた。

伝造さんはいつも社宅から作業着をきて出勤していたが「坑内でいつ行動をおこすかもしれないから」といって三池労組のハチマキを作業着のポケットに入れていた。

脱がせた作業着を廊下にポンと放りだし、その上にポケットからでてきたハチマキを投げた。廊下にはすでに何人もの遺体からはいだ作業着が、山とつまれていた。

恒子さんは飛びついて作業着とハチマキを拾った。伝造さんの遺体をのせた台車が処置室に入っていくので、いっしょに入ろうとしたら、白衣の人が大手をひろげて立塞がり

「家族の人は入らないで下さい」とどなりつけ、バタンと大きな音を立てて戸を閉めた。

トラックの運転台に

つぎつぎと処置室の入口にはこびこまれた遺体は二部屋つづきの部屋の中で洗われ、ならべられた棺にドンドンつめられて、別の出口から白木の棺になってつぎからつぎにでてきた。

廊下のガラス窓から必死にのぞいていた恒子さんはお棺がでてきたときは、もう逃がしたらいかんと思ってしがみついてしまった。人夫がお棺をかつぎ待っているトラックに、まるで荷物のようにほうり込んでいく。体育館に運ぶためだった。

伝造さんのお棺がのせられたトラックの運転台に恒子さんはとびのった。

運転手は

「あなたはよく乗ってきなさったですネ。私たちも一人でも家族の方をつれていこうと思っていた」といって心よく体育館までつれていってくれた。

「おかげで私は天領病院からずっと主人の横についてやることができました。中には体育館で百以上もお棺をあけて探した人もいたのに、それにくらべればいくらかでも心が安まります」と恒子さんは語った。

夫の遺影を抱けば、元気だったころの姿が目に浮かぶ

主人の遺体の前に立塞った会社の人

恵一君も結核にたおれる

冷たい会社に怒り

月々七千円の待機手当

長い闘病生活を耐えぬいた恒子さんは、人一倍明るい奥さんだった。

「守る会」活動の武器

CO闘争を三池労組とともに闘ってきた社青同を中心にいまCO闘争をがいした映画

「三池からの報告——CO闘争はつづいている」（仮題）の制作が計画され、いまカメラ・マンを中心に三名のスタッフが三池労組の本部にとまりこみ連日撮影をつづけている。

この映画は白黒、十六ミリ三十分にまとめられる予定であるが、完成は十二月になりそう。

これを計画した社青同は、この映画を武器に「CO患者を守る会」の結成を強力にすすめていく方針である。

うきぼりにされる闘い

映画はCO患者の実態をはじめ病院に寝泊りして看護にあたっている家族、試験外泊で帰ってくる患者をむかえる家庭、名ばかりのリハビリテーションをうけている人たち坑外、坑内作業につけられている治ゆ認定された患者、そしてCO闘争を闘う患者、家族、遺族、守る会の姿もえがかれている。

これらのものを通して三池の闘う労働者の姿がうきぼりにされる。

制作活動も活発に

制作を積極的に推進する努力もすすめられている。たとえば社青同東京地本の千代田支部では五万円を目標に大衆カンパを行ない制作費を協力することを大会で決定している。

また、参議院議員の上田哲氏や向坂逸郎先生なども実行委員会に参加するなどひろがりをみせている。

カメラ・マンの江連さんは今度大牟田でも上映される「ヒロシマの証人」のカメラ・マンでもあり、完成が期待されている。

映画「三池からの報告—CO闘争はつづいている」の制作すすむ

化しよう〝反合闘争〟

〝問題提起し討論集会

福岡県評では、秋季闘争から明年の春闘にかけて労働災害、転業病撲滅の闘いのための体制強化とあわせ各ブロックごとに〝反合理化討論集会〟を開

「不起訴」からまき返された

「検察庁が会社の責任を不起訴にしてから一切のまき返しがはじまったようです。私たちが検察庁に抗議に行っても何も答えてくれない。私たちの闘いをつぶす大きな国の権力が動いているようです。政治的にも闘わなければと思います」

恒子さんは最後に力強く語った。

忘れるだろう、とでも思っているのでしょうか。私たちはいつまでも遺族であることを忘れないし、会社にあくまでも責任を追及します」